

# 幕張ベイタウン・コア文化振興基金主催コンサートの分析

2016/03/18

コミュニティコア研究会はコンサートピアノ購入のためのチャリティコンサートを運営し、その収益金をピアノ購入基金としてプールしてきた。これは営利と見なされがちで公民館では運営が難しい有料コンサートを行うために文科省及び市と調整した際、チャリティなら可能との回答を得たためでもある。

ピアノ購入後は残金を文化振興基金とし、ピアノ維持管理費用や文化振興のために充てた。この基金は同時に、他の団体もコアで有料コンサートを行う場合チャリティでなければならないため、その収益金を文化振興のために寄付することとし、その受け皿としても機能した。

その後 2005 年度に、当時の伊藤正昭ベイタウン自治会連合会会長が幕張ベイタウン・コア音楽ホール文化振興基金という団体を組織した。

上記の文化振興基金を使い、コンサート等の運営を通じて文化振興を行うことを目指したものである。しかし、活動内容としてはコア研のコンサート運営と変わらず、コンサート運営もコア研が行っていたので、実態はコア研を自治会連合会から新たな団体へ、所属を移しただけに他ならない。

実態はコア研だが、上位層をもつようになり、理事長は伊藤氏が就任、理事会は自治会連合会やシニアクラブをはじめとする地域団体の長によって構成された。この理事会で活動の審査をすることになっていた。

なお、組織としてはどこにも所属しておらず、独立している。

コア研メンバーの大半は、この改組に首をかきげた。連合会の下部委員会が大きな財源を抱えることを問題視する向きもあった様だが、それを除けば新規組織にするメリットは見当たらない。上位層をもつことで活動の自由度が落ちたり、手続きが増え、活動の妨げとなる。また、対外的にはコア研の名称と活動が知られていたため通りがよく、連合会の下部組織であることも行政的にメリットがあった。コア基金という新たな組織に組み替えることには、デメリットしかなかった。実際、コア研時代は公民館からコア設立に寄与した団体として運営への意見をも求められる存在であったが、コア基金になってからは公民館から自治会でも何でもない、非公認の正体不明なサークルとしか扱われなくなってしまった。

組織を立ち上げた伊藤氏が 2012 年度に突然理事長を退任し、2013 年度には会計も不在となった。いずれも後任不在のままで、会計退任以降会計報告及び監査も行われていない状況になった。また、肝心のコンサート運営の実態もなくなり、もはや信用を得ることが困難になった。

コア研以来の「基金」は文化振興の資金であると同時に、有料イベントをチャリティで行うための寄付受け皿としても機能していたが、寄付を行う対象としての信用が失われており、もはや受け皿としての機能も失った状況になっている。

このため、この組織の解体が提案されている。

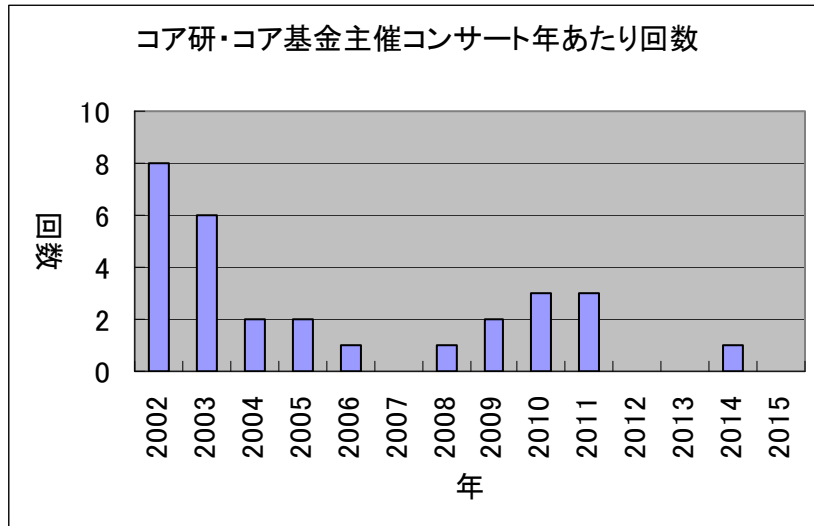
この団体について、コンサート運営を中心に振り返ってみることとする。

**コミュニティコア研究会及び幕張ベイタウン・コア文化振興基金  
主催コンサート一覧**

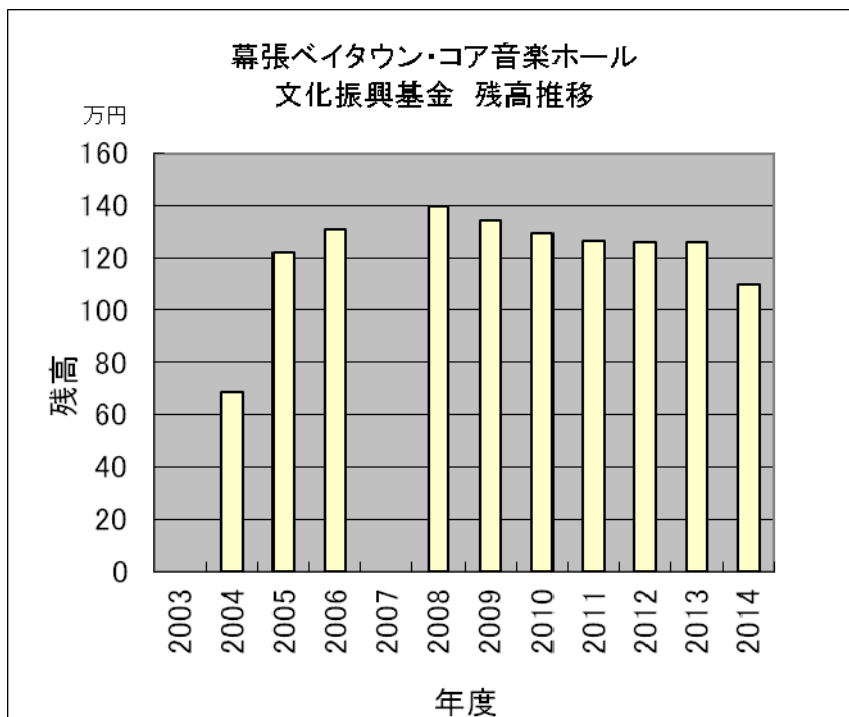
日時	タイトル	サブタイトル	コア 研 主 催	基 金 主 催	再 演
2002/3/31	第1回クラシックコンサート	仲道郁代ミニコンサート	○		
2002/4/13	アイリッシュミュージックナイト		○		
2002/5/19	第1回親と子の音楽レストラン	打楽器トリオ「アイリス」	○		
2002/6/8	第2回クラシックコンサート	仲道祐子 FAZIOLIを弾く	○		
2002/6/23	第3回クラシックコンサート	天満敦子バイオリンコンサート	○		
2002/9/22	第4回クラシックコンサート	藤原真理 珠玉のチェロ名曲集	○		
2002/11/2	緑の国アイルランドから音楽の贈り物	〜クロフォード ピアノ・トリオと仲間たち	○		
2002/11/17	第2回 親と子のための音楽レストラン	ハーブとチェロに大接近！	○		
2003/3/2	ニューフィルハーモニー オーケストラ千葉	「春を呼ぶコンサート 2003」	○		
2003/3/23	第5回クラシックコンサート	サイ・イェングアン ソプラノリサイタル	○		
2003/6/8	第1回幕張マタニティ・コンサート	〜安らぎの音楽と声の世界〜	○		
2003/6/28	第6回クラシックコンサート	松本和将ピアノリサイタル	○		
2003/7/27	第4回幕張アジア講座・ ガムラン演奏会	〜インドネシアの音楽と踊りを楽しもう〜	○		
2003/11/22	ウィーン・ピアノ5重奏団演奏会		○		
2004/9/19	第1回チェスキーナ記念コンサート	中井亜希子	○		
2004/10/31	第3回親と子のための 音楽レストラン	マンドリン、チェロ、ピアノ	○		
2005/4/17	鈴木弘尚 ピアノリサイタル			○	
2005/9/11	高木竜馬ピアノリサイタル			○	
2006/2/12	高木竜馬・スヴェルドルフ ジョイントリサイタル			○	○
2006/7/16	松本和将 ピアノコンサート			○	○
2008/7/13	黒川侑 バイオリン リサイタル			○	
2009/1/15	高木竜馬・薫子ピアノリサイタル			○	○
2009/5/10	松本和子 ソプラノ・リサイタル			○	
2009/12/27	黒川侑 ヴァイオリン・リサイタル			○	○
2010/2/14	實川風 ピアノ・リサイタル			○	
2010/8/29	渡辺玲子 無伴奏 ヴァイオリン・リサイタル			○	
2010/10/24	ファミリーコンサート	チャイルドフッドコンサート		○	
2011/2/20	第4回親と子の音楽レストラン	須関裕子のピアノ物語		○	△
2011/8/27	FAZIOLI が奏でた ショパンコンクールのすべて			○	
2011/12/23	黒川侑 ヴァイオリン リサイタル			○	○
2014/8/3	黒川侑 ヴァイオリン リサイタル			○	○

## ● 文化振興基金コンサート運営の分析

- 同じ演奏家が繰り返し呼ばれる傾向が強い。
- 若手演奏家で知名度があまり高くない演奏家ばかりが繰り返し呼ばれており、街の住民の集客ができていない。代わりに演奏家の固定ファンが演奏会を訪れる傾向が強い。街の文化振興のはずが、誰のためにコンサートを行っているのか判らない。ただし、高木竜馬については千葉・近隣の出身でベイタウン内でもある程度の知名度はある。
- コア基金による運営になってからコンサート運営頻度が極端に落ちている。コア研時代の3年間で16回、基金では10年間で15回である。2015年度までに、開催されていない年が4年ある。



- 知名度の高い演奏家を呼ばなくなり、コンサート収益を得られなくなった。
- 赤字覚悟の親子向け文化振興的なコンサートもほとんど行われなくなっている。
- 若手演奏家コンサートの多くが、知名度の低さから集客につながらず赤字である。
- 下の資料が示すように、基金残高は2008年度をピークに減り続けており、現象の原因はおもにコンサート運営の赤字によるものである。なお、2013～2014年度については会計報告がなく、支出入からの推定である。また2015年度は全く資料がないため掲載していない。



コア研時代には著名演奏家のコンサートを開催することで資金を獲得し、その資金を使って赤字覚悟の文化振興コンサートやベイタウンに円のある若手育成目的のコンサートを運営していた。

ところが、基金になってからは、下川正晴退任後の事実上の代表者が著名演奏家を呼ぶことを嫌い、資金の獲得ができなくなった。一方で、代表の交友関係にある、一般知名度が低くベイタウンの住民が足を運びにくい若手演奏家のコンサートばかりを繰り返し、赤字を重ねるようになった。

事実上の代表者の個人的交友関係や嗜好によってコンサート運営がなされており、公共的な資金とボランティア資源を私物化する、極めてずさんなコンサート運営がなされていたと断じざるを得ない。

地元地域団体の長によって構成されるとしていた理事会による審査制度も名ばかりで、審査そのものがほとんど行われず機能していなかった。

また、理事長が突然退任し、会計担当者も担当者の交替を訴え続け退任。いずれも後任がなく、2013年度以降、会計報告も会計監査も行われなくなっている。もはや組織としての態をなしていない。

このような運営実態では解体が相当であると考えられる。

ただし、110万円程度と推定される資金についてはどのように処理を行うか、検討する必要がある。

以上